蟻通
たいめり
楊貴妃
ときさ
藤戸

八

蟻通

次第 和歌の心を道として和歌の心を道として玉津嶋に参らん

是は紀貫之にて候我和歌の道にまじはるといへども未住吉玉津嶋に参らず候程に只今思ひ立紀の路の旅に志し候

夢に寝てうつゝに出る旅枕

れ志もやのゝ非ハきねあらうし
と社中よ宮寺揺りもあさらすよ
よしく御燈ハ暗く和光の影ハ
よもうかし墓ぶさ之宮寺荒や
罕 あわく具次の苑よついてやくき
るすれん 此あつりよハ古宮もあし
べうかはきへ杜角のうあき 罕 との

くゝほりよ行ほさまもみしのゝ志つもま
たる詞さえかして前なもと急して
御せ 摂下馬ハわうりもあうりき
写う 罕 ろうや下ろるとはのもなく馬
上乃ちうき前ゟ 墓句跡あつはるす
や蟻通の明非とそおとうめし給よ
陀非のつくうてきりて馬よあらハ

人の言葉のまゝにて神慮に叶ひ給へ
きと思ふあらそふことの葉のだにも恐ぞと
心に念願しが雨雲の立かさなれる
よはなればありとほしをも思ふべきかは
シテ「天雲の立かさなれるよはなれば
ありとほしをも思ふべきかは面白しく
我らが叶はぬ耳にだにおもしろしと

思ふ此歌をなどか納受なかるべき
ワキセン「ころよまさるとうきは行か神慮に
背くべきと　シテ「萬の言葉はあ和歌の
ワキ「立さまありて晴き夜あれは　シテ「いつり
それほど思ふべきかゝし言音面白の
御歌や　凡歌には六義あり是
六道のちまりめでひて六義

色をかんじ聲あり　上音　しかれば和歌の
ことわざは神代よりもつたはりいま
人倫にあまねし誰か是をほめざ
らん躬恒も貫之は御書ところにて
うけたまはりていにしへ今の道の歌
をしるしえらびて後ひとのへし
君が代のをさまる道をあらはせり

クセ
あまりうたはれつくこれは歌の心をも知
とあるは是をとりて私ある人代よりん
てたかうをとる風俗長歌短歌
旋頭混本のたぐひ是あり雜躰
またつよあらりきは源流風をやく
まきるすれ花のうちの鶯又秋の
蝉の吟の聲何れも和歌の数あ

五人の神楽をのこゆきの袖をかへし
おゝゆふ花をかさしつゝ神慮をは
もしめ奉る御神楽よまいさそて
ばも神慮をいさめんかう経や祢
神慮をすゞしむる和哥より
そようろうきこえし其中にもかくら
を奏し乙女の袖をひるかへしもそて

おもしろや神の岩戸の古への袖ぞ白
かゝれて和光同塵は結縁のはじめ
ワキ「八相成道は利物の終　シテ「神の代七代
ワキ「もろほとけあらはして　シテ「精欲わつら
つるなり
地「天地ひらけはじまりし
より舞歌のみちうつもれしまこと
シテ「して貫之か言葉の末の末の妙成

心もと惑もなよりに姿をとゝめ
そとそて鳥井のかさきに立かくれ
ありはされけりとぞしまゝなくかき
きえうせにけり貫之も是
を悦ひぬ鶏の神楽夜ハ明て
捨つ宮ゐを立出つらし

忠則

次第
花をもうしと捨る身乃〱月にも
雲はいとはし　是ハ俊成乃御
内ニ有し者ニて候　扨も俊成
なく成給ひて候程ニか様乃姿とな
りて候　又西国を見ず候程ニ此度
思立西国行脚と心ざし候

サシ
城南

乃龍宮よりもむさし都を隔つる山路
や關戸れ宿ハ名乃ミて泊りも果
ぬたひ乃あはれひなき所ハ涙もまし
り風塵の浮世乃あくた川いざかたの小
篠をまけるらく月も宿かるこや
乃池水底清くもあらて世芦の
紫ゟ葉風のそゝとくぎりしともる

ようきことの捨る身ともあら風山
かくれぬねなる世中乃かなきはこゝろハ
あぶ夢のさむるまくらよ鐘をきゝ
緑波ハ弦よあるたかしあさ浪音さ
ぶ舟のれく　憂世をわたるらう
ひとそがくうさわさみもありせ風乃
がきまあ時たよ塩木をちこへハほとと

もひまハあれ哀乃浦山かきてま海

乃海　一セイ　あまのよび声ひまなきにしば

なく千鳥音ぞすごき　サシ　抑此

須磨の浦と申ハさびしきゆへに其名

をうるわくらはにとふ人あらば須磨の浦

にもしほたれつゝわぶとこたへよ実

や漁乃あまの小舟もしほの煙松の

げにいつまでかさびしかりしと云ふあさき

詞　又此須磨乃山陰に一木の桜の候

是ハある人のなき跡のしるしの木

なりおりふし時しも春の花手向のため

に逆縁ながら弔ふ山よりかへるさを

まことに薪に花をおりそへて向

をなして帰らせし　罕陌　いうた

是なる老人に御身は此山がつにて
ましますか
シテ さん候此浦の海士にて候
ワキ 海士ならば浦にこそ住むべきに山ある
方に通はんをば山人とこそいふべけれ
シテ そも海士人の汲む塩をば焼かでそのまま
置くべきか
ワキ げにげに是は理なり藻塩
焼くなる夕煙
シテ 絶間を

遅しと塩木とる
ワキ 道こそかはれ
里はなれ
シテ 人音まれに須磨の浦
ワキ 近き後の山里に
シテ 柴といふもの
地 塩木のために通ひ来る
あまりに愚かなる御僧の御言葉やな
げにや須磨の浦よその所にや替るらん
それ花につらきは嶺の嵐や山颪

しなには入たれとも勅勘の身のかなしさは
よみ人しらすと書れし事
妄執の中の第一なりされとも
撰し給ひし俊成さへ亡数なれは
御身はうちにありし人なれは今
の定家君に申作者を
つけてたひ給へと夢物かたり申に

すまのうら風も心せよ
クリ地 そもや
和哥の家に生れ其道をたしなミしき
しまのかけによりし事人倫におゐ
てもつはらなり
シテサシ 中にも此忠度は
文武二道をうけ得て世上に眼
たかしそも〳〵白河院の御宇に
千載集を撰はるゝ五条の三位俊成卿

ぞうきなつく見せきんず年は寿永
の秋の比都を出し時なればさも閑
かりし身の心の花か蘭菊の
きつね川よりひきかへし俊成の
家にゆき歌の望をなげきしに望
たりぬればまた弓箭にたづさはりて
西海の波のうへしばしと頼むすまの
うら源氏のすみ所平家のためは
よしなしとしらざりけるぞはかなき
さる程に一の谷の合戦今はかうよと
みえしほどにみな舟にのりて
海上にうかぶ我も舟にのらんとて
みぎはの方にうち出しに後を見れば
むさしの国の住人に岡部の六弥太

御頭をうち落し　六弥太心に
思ふ様いたはしや彼人の御死骸を
見奉れば其としもまだ長月
比のうすくもりふりみふらずみさため
なき時雨ぞかよふむらもみぢの錦の
直垂はたゞよのつねによもあらじ
いかさま是ハきんだちの御中にこそあるらめ

と御名床しき所にゑびらを見れ
ば不思議やなたんざくをつけられたり
見れバ旅宿の題をすゑ行くれて
木の下陰を宿とせば花やこよひの
あるじならまし　忠度とかゝれたり
扨ハ疑ひあらしの音にきこえしさつ
まのかみにてますぞ痛はしき　此

花の陰より立ちより給ひしぞかし物語を
やすらひて日も暮しぬればあり
しばしは暫しひよもあらじ花は根にかへるなる
我もまたひとたび給へ木陰を捨れ
宿ときけば花ぞあるじなりけれ

次第 楊貴妃

我まよひぬるこころのあれしく道を
いつとか尋ねん
是は唐土玄宗
皇帝に仕へ申方士にて候扨も
我君まつりことたゝしくまします御
世を守み色を好ませ給ひ艶色を専と
し給ふによつて容色世に双れ美人

さともたまふ楊家の娘とうまれつ
く其名は楊貴妃と号せし然に
去子細あつて馬嵬が原にて失ひ
やて候へば帝歎かせ給ひ急
き魂魄のありかを尋て参れとの
宣旨に任せ上碧落下黄泉ま
て尋ぬれども更に魂魄の有かを

あらん候に未蓬莱宮に有と
ば頃は蓬莱宮にと急候
尋ねゆくまぼろしもがなつてに
てもたまのありかをそこと知る
も浪路をとうきて行舟のほのかに
みし嶋山の嶺のうねれ松に
常世の国に着にけり急ぐ程

に蓬莱宮に着てハ此所なく
妻寿やと思へハ有し教へに随つ
て蓬莱宮に着てみれハ宮殿
さんしとして又に鳥遍隠もなく
楼閣きうとしてちらす七寶を
ちりはめたり漢宮萬里乃粧ひ長
生驪山乃かの様も是にハ勝らず

あざらかへらひ覚えつゝし此所や
あま教へのごとく宮中を見れハ太真
殿と額のうたれたる宮あり先此所
に徘徊しこの由をもうかゞはゞやと
思ひ　昔ハ驪山の春の園に共に
詠めし花の色うつれハかはる有りさま
ひとへに蓬莱の秋の洞に獨り

なかむる月陰もぬるゝかほなる袂
かなあら恋しのいにしへやな　ワキ詞「唐の
天子乃勅の使方士是迄まいりたり
玉妃ハうちにましますか　女「何唐
帝乃使とハ何しに宮にまいれる
九花の帳を押のけて玉乃
簾をかゝけて「立出給ふ御姿

女「雲のびんづら　ワキ「花のかほばせ　寂
寞たる御眼のうちに涙を浮へさ
給へるを　梨花一枝雨をおび
たるよそほひのたいえきの芙
蓉のくれなゐ未央の柳乃みどり
も是にハいかで増るべきげにや六宮
乃粉黛の顔色乃なきもさこと

けふの恋慕乃涙旧里を思ふ縁をと
きひ掛しもかえきすかたは忽
帰りて参ゆきん去なる御筆乃
おもかけ絵へ其社あまりかなしみよ
とて玉乃かんざしとり出して方士にあ
たへ給ひけれハいやとよ是ハ世の
中にありふるへきものなれバいかてか

信し給ふへきねかはくハ君と人しれす
契り給ひしことの葉あらバそれを
験に申へし
宮も理りあり
思ひ出る秋もまつ其初秋の七日
の夜二星にちかひし言の葉にも
上 天にあらバ願くハ比翼乃鳥と
ならん地にあらハ願くハ連理の

枝とならむと誓ひし事ぞひそか
に伝へよやさゝめごとあはれたしとそれ
うむる洩られしはかなくも世の中
甚れし流れ共のちるなひとぞ甚
或は馬嵬に留まりたまふあはれ仙宮に
至りつゝ比翼も友を恋ひ独り翅をかた
しき連理も枝朽ちてたちまち色

を変へたり同じ心のゆく思ひあはれとも
経のあはれを頼むぞと語り給へや
はらはらといひて出舟乃律ひや泣る
はかと思ひそまかしけれ猶いかならん
そのころの秋までの行中よまた
乃常めぐりあふことも志らぬよそよ
しはらは志のしまでかたやゆふとお

中のおきふしとかや秋もそのかこち
天上界の諸仙たるが昔のちぎりあり
て仮りに人界に生れきて楊家の
深窓に養はれいまだ人知らざりしに
君聞し召されつゝ急ぎ召し出し后宮に
定め付給ひ偕老同穴のかたらひ
も縁つきぬれハいたつらに此嶋に

またかへり来りてもとの水宮
あはれはかなき身の露のあだまよ
あひみぬより猶まさりさむし
思ふくも出ては恨みある文
月の七日乃夜君とかはしゝむつこと
乃比翼連理の言の葉もかはりくは
あらちりめとの深乃ふかきよの契り

菊の世とよの臺よみしきつきて
うかゝまりきれ

木賊

次第 信濃路をさすがさ様哀しく日をもさもきれ
きゝみ心うれし 詞 是ハ都の者にて候
又是に渡り御入候 幼き人ハ國ハ信濃の者
人にて候ハ所々へ父を持候が今
一度御對面ありたき由仰られ候間同道申
信濃國へと急候 いかにや

みてや一家をあけてたゝせられ候へ
（ワキ詞）荒うれしやさらはまつこなたを出候
（ツレ）如何にお僧達御心易く候へ参られ
尉殿はもとより思ふ風ひて時々は我
あさき風情の人を持を心得候てはあ
ひしらるゝへ（ワキ）心得申て候（シテ）いかに僧達
どもへ心静に尉が身のうへを語つゝ

申まいらせ候洪尉は子ながら一人持しか
ど行方しらぬ人になりて候昔子
友ひて人なみをもゆく處をも思ふは洪
蹈に居所をさだめず行きて人をとらあ
よりかゝりに筝は不寄曲舞にをきて
あまた集る舞うひ弦に洪尉も
時々は舞唄ひ謡の有は盃をとり手をたゝき

かほしめさるれそこ迄も汲らく
志る法の菊水と聞て飲酒の心をまそて
そのほか百年よ老ぬやまひも
仙家に入ぬれば日月の寒暑をもしらず
旧里に帰つて七世の孫子にあひつるも
ひとりいまや一世の親子として
ぢしを情ありてみさんじ薪を

かりだき老ぬる母を養ひこそ虞舜ハ親老
盲おいなる父をうやまひける
明乃恵ありとし孝恩の心ありけんやと
帝の位を譲りたり然るに教主釈
尊も頭眼為長子と説給ひしかんや
二仏乃中間の衆生として君の為を
まつりんハ求るよしとまうけんず石乃火の

夢か夢とも一つ家のうちにかへりて暮れ
かくて親子にあひ行のつゞく繁昌
を行くあらたく仏法流布の寺となり
仏種の縁となりにけり跡にかきぞや
是物語りを世の中に残すなりけり

藤戸

次第 春みなとの行末や藤戸
の渡りなるらん 是ハ佐々木の
三郎盛綱にて候扨も藤戸
の先陣を仕りし御恩賞に児島を
給て候日もよく候ほどに只今
入部仕候 秋津洲の浪静成

も因果のめぐる小車のやたきれ
人の罪科ハ皆華にてこそいひけれ
拍子おかしくも鳴り実科もためしあり
涙の床よ去りぬめ給ひし情なさや
まつきそひしおきれてたゞ前ままう
てはおかり 何と拍子を涙に沈め
恨とハ更に思ひまを 梅おさ拍子を

波に沈め給ひし下ハん あつ音た
うけとく おみ拍子も人ハ去りしと
おみ申しに具の様を語りて給を
も申ひすハ世をもすがゝ絶えたる舞の前とも
どひ慰めてふひ給ひすか恨もさる
へきうに いつはとそて君が山の西よ
うひおさい世の人乃捨ひ草もこけ

さ袖を何と濡しける旅の 住果ぬ浮世
八幡の宮あるとて親子とて行や
須磨ずまゐよはれきてあるきハ悲ひ
の嘆かはしくとひくきつかとおつらく苦
しこの海に沈め給ひしと責て見内を
給へや跡とふらひをたまへや 言語
道断かゝる不便成る事とよ今ハ

何をつゝむべき是本の有様語りて
ばきかへしぬよくつく〳〵聞へ語も去
年三月廿五日の夜に入て浦の男を
一人ちかづき此海を馬にて渡すべき
所やあると尋しかば者やうかんに
何瀬の様なる所の月がしらに東
にある月の末にハ西にあると申し郎

八幡太夫義隆の末吉と思召ば家の子
わかたうもかく隠しば若と唯二
人起にまぎれ悪日出洸海のあさいを
見直さく後にしか盛経にもかやうに
やく下藤ハ節あき者なくばこそやく人
に語らんと思召ば不便にハ存しかとも
どうく沙よき二刀にて具まく海に

沉めらく帰思しか母ハ海の子にてあり
きるるよおぼよしく行方も客[?]母の手
と思ひとハ恨をかれ之 女詞 母君に我子
をもちに後にしか於前ハそうわさいつ
生れ住みて作る 詞 あまりにみしらう
きへの岩のからずつの水のかみんの[?]
嫌をかくかくしてあり 母君への[?]

あるがうちにも辰がかゝやあまゐる
ごうきんの岩の上に神とつまそ行
そのの秋のごとくあるかゝおもとぬらく
胸のあうとぢし角さいらとさる
きはうも尾を背くとある風を真
まく海に押しれられて千寿の底
沈ける
押節ひく塩にじく

まそ行浪の浮ぬ沈ぬ埋木入岩の
磯にあるかしかく苦しみのみあかこれ
悪龍の水神とあつく恨どあきんと
思ひしに思ひけるに仏法の御法の
功徳によりてぞえそ仏弘誓の舟に
浮へみおきし棹ざし て ゆく道に
すぐ死の海をわたりてかりひの岸に

やもくとば君よゞうりくて彼
岸よ至りて成佛とくだつの身
やとなりぬ成佛乃身とぞなりける
きこいとま

右之本者観世太夫織部
章句眞本令版行畢
正徳六丙申歳弥生
天保十一庚子歳孟春改正再校
皇都二条通御幸町西江入町
山本長兵衛